



大藏岩満氏（元三菱電機）

鹿兒島県沖永良部島の出身の大蔵氏が溶接の出身の大蔵氏が溶接に携わるきっかけは「同級生の親戚が当時に三菱電機で働いていて、その同級生を採用しに会社の人が島にきた。その時に一緒に何人か採用しようとなり、学校の同級生3人が技能訓練生として1970年に採用された」で、特に最初の1年は機械や電気、仕上げなど色々な職種を回り、

本人の希望や適正を指導員が判断し、その後色々な職種があったが、技能を身に着けたほうが将来はよいだろうと考えて溶接を志望した」と大蔵氏。

最初は手溶接からはじまり、3年目から本格的に溶接職場に配属となる。溶接の経験も徐々に積んできた22歳の時に技能五輪の指導役に任命される。

それまで神戸製作所では、技能五輪の選手強化に本腰は入れておらず、1・2ヵ月程度の練習で大会に出場していた。「やはり大会で結果を出すことは難しかった。私自身も1年目に選手として出場したが思うような結果はでなかった」。神戸製作所として、年間を通じて選手の強化に取り組もうとなり、大蔵氏にコーチの白羽の矢が立った。

「選手と年齢が近い方が良いとおそらく思われたのも理由だと思うが、このコーチ経験が私自身の溶接技量の向上に非常に役立った」と振り返る。

大蔵氏が指導をはじめた一年目の年にアルミのティグ溶接が競技に導入された。「職場ではあまり普及していませんでしたので、まずは自分が勉強をする必要があった」。

当時、三菱電機の伊丹製作所が技能五輪の協会の溶接競技会の存在を知った大蔵氏は選

【3面へつづく】

「うなるのか」ということを考えて、
を整理して指導する。続けることの重要さを
「高校生にはとにかく伝えていきたい」と力
強く語る。